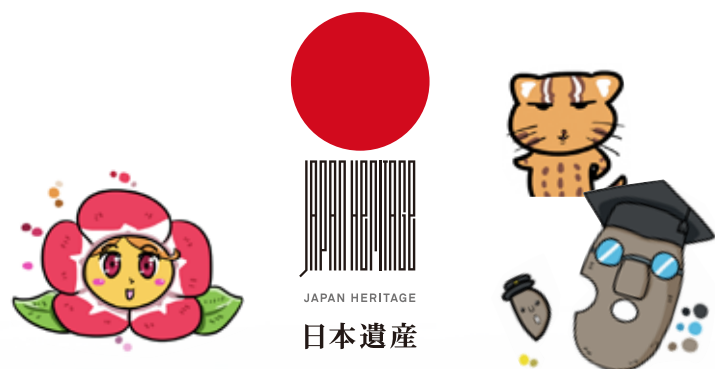




この冊子(パンフorブックレット)は、皆さんがこのような“長崎のしま”の歴史にもっと興味をもってもらうためにつくりました。そのためにどこから読んでもいいようにテーマを設定し11章にまとめています。また皆さんの知識の幅を広げるためのコラムも用意しました。

この冊子を読んで、さらに“しまの歴史”について深めたいと思われたならば、本冊子の姉妹本である『日本遺産国境の島―対馬・五島―交易・交流と緊張の歴史(2018年 長崎県発行)』を手にとってみてください。そして実際に自分の足で現地を訪れて肌でその歴史と文化を感じてみてください。きっと新しい発見があることでしょう。



JAPAN HERITAGE

日本遺産

「国境の島」の ひみつ

日本遺産

対馬市

壱岐市

五島市

新上五島町

国境の島 関連年表

壱岐・対馬・五島などに関するできごと

中国・朝鮮半島の ようす

長崎県には971の島があり、日本でもっとも島の数が多い県です。日本の西の端にある長崎県の島々は、朝鮮半島や中国大陸と海でつながっており、古くから深いつながりを持っていました。長い歴史をふりかえると、交易・交流がさかんなときもあれば、対立・緊張関係の矢面に立たされたこともあります。しかしこれらの離島地域と大陸とのつながりを抜きにしては長崎県のみならず日本の歴史を語ることはできません。

「国境の島」を抜きにして 日本の歴史は 語れない

縄文 ●対馬佐賀貝塚
海洋漁撈文化、朝鮮半島との交流を示す

弥生 ●対馬ガヤノキ遺跡 対馬海人の交易活動 **P3**
広型銅矛が大量に出土(北九州製)

●原の辻遺跡 一支国は邪馬台国連合の一国

古墳(飛鳥) ●ヤマト政権の朝鮮半島出兵
通常は大陸と交易・交流

●壱岐古墳群 ヤマト政権の基地を壱岐に置く **P5**

630 遣唐使はじまる(北路)

667 対馬に金田城を築く

675 遣新羅使(～8世紀)

702 遣唐使、南路にコース変更

奈良・平安 ●804 空海・最澄が乗船した遣唐使船、五島を出発 **P11**
894 遣唐使派遣中止

927 「延喜式神名帳」成立…対馬29座、壱岐24座 **P9**
1019 女真族、対馬・壱岐を襲う「刀伊の入寇」

鎌倉 ●1274 文永の役 元・高麗軍が対馬、壱岐に襲来 **P17**
1281 弘安の役 東路軍、対馬、壱岐を襲う **P15**

南北朝・室町/戦国 ●前期倭寇がさかんになる
●海の武士団(松浦党)の活発化 **日島石塔群 P21**
1404 明との勘合貿易はじまる

1419 応永の外寇
朝鮮軍約1万7千人
1550 フランシスコが対馬浅茅湾に襲来
1551 大内氏王直ら中
1559 王直が明によって処刑される
159 1 秀吉朝鮮出兵を命じる **P23**
壱岐に勝本城、対馬に清水山城を築く

1592 文禄の役(壬辰倭乱)
1597 慶長の役(丁酉倭乱)

江戸 ●宗義智、日朝国交回復に動く 1603徳川家康、江戸幕府を開く **P27**

1607 江戸時代第1回目の朝鮮通信使来日

1609 慶長条約締結、日朝貿易再開
朝鮮外交は対馬藩に任せる

1689 対馬藩、雨森芳洲を招き抱える **P29**

1764 第11回通信使のとき、対馬の孝行芋(サツマイモ)が朝鮮に伝わる。
韓国では「コグマ」という

1863 五島石田城(福江城)完成

明治 ●1871 廃藩置県で対馬藩領は厳原県、壱岐は平戸県、五島は福江県となる

高句麗・百濟・新羅
527 筑紫磐井戦争
589 隋、中国を統一
618 唐、興る
663 白村江の戦い

960 宋建国
936 高麗、朝鮮半島統一
907 唐滅びる

1260 フビライ=ハン即位
1259 高麗、モンゴルに服属

1368 明建国
1392 朝鮮建国

1627 後金軍の侵入
1644 明滅亡 清



第1章

弥生時代

対馬市

銅矛のなぞ



写真Ⅰ／海神銅矛

矛って突く武器ですね。写真Ⅰを見てください。両手でやっと持てるくらいの大きさで、刃はなく、とても武器には使えません。昔から祭りに使う祭器と言われてきました。対馬には130本もの祭器銅矛が確認されており、ずば抜けて全国で一番多いのです。

遺体を埋葬する石棺からも出土していますが、多くは畑を耕作していたとき見つかった、工事をしていると偶然出てきた、といった出土状況です。その石棺からは、弥生時代の遺物が出土していますから、銅矛も弥生時代のものと考えられます。

具体例として仁位浅茅湾貝口浦に浮かぶ黒島の場合をみましょう。美津島町長板浦から対馬市営の渡海船「うみさちひこ」に乗船して、船が仁位湾に入ればしばらくすると、左手に写真Ⅱの島が見えます。その黒島の畑の地下70cmくらいのところに15本の広型銅矛が並んで埋まっていたというのです。



「国境の島」を抜きにして日本の歴史は語れない



対馬市

浅茅湾

対馬
やまねこ空港



これらは東京国立博物館に11本、奈良国立博物館に3本、細川家に1本収蔵されています。どうして細川家(旧熊本藩主)なのでしょう。ついでに東京国立博物館には、豊玉町大綱から出土した銅矛も11本所蔵されています。

かつて対馬には、貴重な文化財が出土しても保存する博物館などの施設がありませんでした。現在は県立対馬歴史民俗資料館があり、もうすぐ対馬市立の博物館も完成します。対馬の文化財は、対馬で保存し公開するのが一番いいのです。それはどこの文化財にも言えることです。

ところで、こうした銅矛の鑄型は北九州で出土していますから、弥生時代の対馬海民が北九州との交易で持ち帰ったものでしょう。おそらく対馬の海産物や大陸から手に入れた珍しい物品を持って行き、北九州からは米をはじめ穀物を持ち帰ったはずで、『魏志倭人伝』に出てくる「南北に市糴」そのものですね。その中に銅矛がありました。銅矛の材質は銅とスズの合金です。時間が経てば錆びてきます(緑青)が、作られたときは神々しく金色に輝いていました。銅鏡もいっぱいあります。

では、対馬海民は何をお祈りするために持ち帰ったのでしょうか。皆さん、考えてみてください。専門家もいろいろ言っていますが、皆さんが直感で思い浮かべたことが案外真実に近いかもしれませんよ。



写真Ⅱ／対馬浅茅湾 黒島

第2章

古墳(飛鳥)時代

壱岐市

壱岐古墳群のひみつ
原の辻から大型古墳へ

壱岐の古墳は特別

壱岐は古墳の数が異常に多い。長崎県は沖縄を除く九州各県と比較すると古墳の数が最も少なく、県全体で500基ほどしか確認されていません。しかし、壱岐にはそのうちの半数以上約270基が確認されています。江戸時代の記録では300基を超える古墳があるとされていますので、実際はもっと多かったのでしょう。なかでも「壱岐古墳群」として国の史跡に指定された古墳6基は特に重要です。

築造時期はいずれも6世紀後半から7世紀初で、同時期の古墳としては九州本土部を含めても有数の大型古墳でした。古墳内の石室からは中国や朝鮮で作られた陶器やヤマト政権と関連すると思われる金属製馬具など豪華な副葬品も見つかりました。この古墳群がある国分・亀石地区の丘陵部は壱岐島全体を治める首長クラスの墓が集中して造られた地域で、その被葬者(古墳に葬られた者)はヤマト政権とも深い関係があった人物だったこと、さらに中国大陆や朝鮮半島の国々とも交流があったことなどがわかります。



	名 称	墳 形	6世紀後半から7世紀の古墳としての特徴
①	対馬塚古墳	前方後円墳	島内最古の前方後円墳、全長63m
②	双六古墳	前方後円墳	前方後円墳の墳丘規模で県内1位、九州内でも5位、中国製二彩陶器出土、全長91m
③	笹塚古墳	円墳	墳丘規模で九州5位、金属製馬具出土、墳丘直径40m
	兵瀬古墳	円墳	墳丘規模で九州1位、墳丘直径54m
④	掛木古墳	円墳	推定墳丘直径28~30m
	鬼の窟古墳	円墳	墳丘規模で九州3位、墳丘直径45m

※①から④は築造された順番で、いずれも6世紀後半中頃から7世紀初めにかけて造られた。

弥生時代の一支国から古墳時代の壱岐へ

弥生時代の壱岐には中国の歴史書に「一支国」と記される王国がありました。王都は多重の環濠集落がある原の辻です。そこは朝鮮を経由して中国と日本を結ぶ中継地として、使節団の交流やモノが行き交う交易の拠点となっていました。地理的には壱岐の東側、玄界灘に面した内海湾の奥深く、幡鉾川流域の平野部にあります。現在の長崎県内でも有数の広さをもつ平野・深江田原です。この集落と大型古墳の集中域とは直線距離で6kmほどあります。一支国王都の原の辻は、4世紀中ごろには環濠集落としては消滅しています。その後、確認されている壱岐島内で最古の古墳は、原の辻遺跡のすぐ近くにある大塚山古墳(円墳)で、築造年代は5世紀末のことです。その間、約100年、壱岐では遺跡の空白期があるのですが、4世紀後半から5世紀といえば、関西地方で巨大な前方後円墳が造られる時期で、ヤマト政権が全国統一政権として確立する時期にあたります。一支国もまたヤマト政権の一部に組み込まれていったことは間違いのないでしょう。さらに約100年後の6世紀後半になって朝鮮半島やヤマト政権と深い関係を伺わせる大きな古墳が、島の中央北部に造られるようになります。

さて、そう考えると1つの疑問が浮かび上がってきます。それは古墳時代になっても壱岐の稲作の中心となる穀倉地帯は、かつて原の辻があった深江田原だと思われるのに、その平野部に面した場所ではなく、なぜ島の中央北部の丘陵地に大型古墳が集中して造られるようになったのかということです。



笹塚古墳



双六古墳



高句麗との戦いとはちがい、より壱岐・対馬に近い朝鮮半島南東部で新羅と戦うという情勢になり、ヤマト政権の遠征軍は、壱岐に軍事拠点を置いたということのようです。対馬に比べ壱岐には平たんな場所があり、かつ、食料も確保しやすく都合がよかったのでしょう。おそらく大型古墳を造営した首長らは、ヤマト政権が朝鮮へ派遣した遠征軍の指導者およびその子孫だったと思われます。壱岐島内で造られた最初的前方後円墳である対馬塚古墳は、湯本湾を見下ろす丘陵地にあり、晴れた日には対馬を遠望できました。ということは、九州本土ではなく、対馬とその先の朝鮮半島を意識した古墳だったと考えられます。大きな古墳は葬られた者の権威を見せつける役割を果たしていましたが、壱岐古墳群の大型古墳は島内に住む住民に対してではなく、朝鮮半島の人々に対する権威を主張する古墳だったのではないのでしょうか。古墳からは新羅で作られた土器なども出土していますので、たびたび対立するとはいうものの、まったく交流がなかったわけではないことも忘れてはなりません。壱岐古墳群の大型古墳とその立地は、ヤマト政権と朝鮮半島情勢を抜きには考えられないのです。



高句麗の全盛(5世紀長寿王時代)



新羅の領土拡張(6世紀眞興王時代)

笹塚古墳石室実測図

藤ノ木古墳石室実測図

笹塚古墳墳丘復元図

藤ノ木古墳墳丘測量図

壱岐古墳群が島の中央北部に造られたわけ

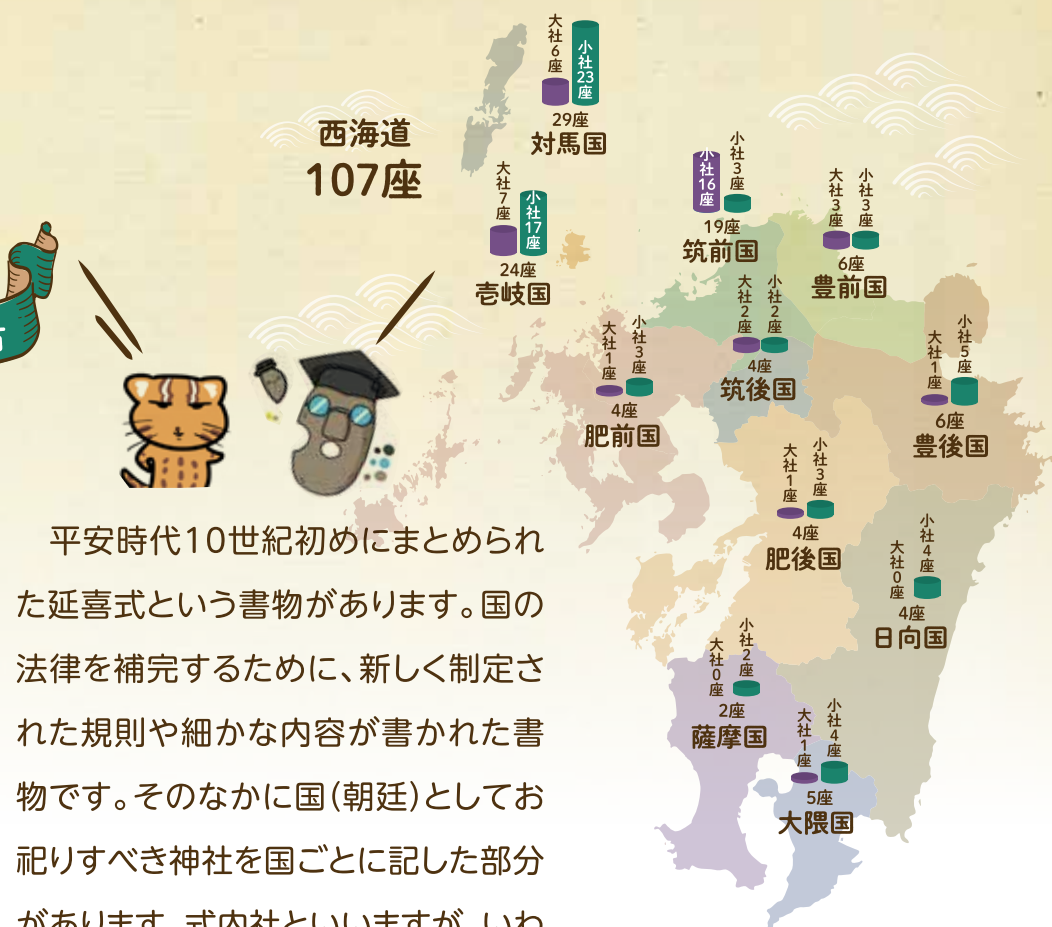
6世紀の壱岐にかかわる大きな事件として527年に起きた磐井戦争があります。朝鮮半島にあった新羅と結んで九州の豪族(筑紫君磐井)がヤマト政権に対抗した事件です。『先代旧事本紀』という書物に磐井と新羅の海人を討伐した人物が伊吉嶋造(いきのしまのみやつこ)に任命されたとあります。ヤマト政権は対抗した磐井・新羅に対して鎮圧軍を派遣したのですが、その統率者がのちに壱岐を治める人物となったということです。壱岐古墳群のなぞは、ヤマト政権と朝鮮半島の関係のなかに秘密が隠されているようです。

4世紀後半から5世紀にかけてヤマト政権は何度も朝鮮半島へ出兵しています。その時は、朝鮮半島南部に拠点を築き、おもに戦った相手は朝鮮半島北方にあった高句麗でした。ところが6世紀になって、南東部の新羅が強大になり、ヤマト政権と友好関係にあった百済をも圧迫し、対立する関係になったのです。

第3章

奈良・平安時代

壱岐市・対馬市

古代の神様の世界で、
壱岐・対馬が特別なわけ

平安時代10世紀初めにまとめられた延喜式という書物があります。国の法律を補完するために、新しく制定された規則や細かな内容が書かれた書物です。そのなかに国(朝廷)としてお祀りすべき神社を国ごとに記した部分があります。式内社といいますが、いわば当時の朝廷が公式に認めた神社ということになります。それを見ると壱岐と対馬は、特別な地域であることがわかるのです。

図(旧国で分けた九州地図の上に円柱グラフ)は古代の行政単位(国)ごとの式内社の数を表しています。それを見ると一目瞭然です。式内社は神社すべてを記しているわけではなく、朝廷にとって重要な神社ということになります。祀られている神様3132座のうち、京都を含めた畿内には697座で、1つの国で最も多いのが大和国の286座ということになります。おおよそ当時の朝廷があった京都から遠くなればなるほど、次第に数が少なくなります。ただし例外があります。たとえば伊勢神宮がある伊勢国は253座とか、出雲大社がある出雲国は187座などで、京都から離れていても式内社が多いのです。朝廷とのつながりが強い国です。その法則でいうと、九州では大宰府(朝廷の出先機関)がある筑前国が最も多のはわかります。それでも19座しかないのに対して、それより多いの

が壱岐24座と対馬29座で、式内社の数で筑前国を上回っています。まさに壱岐と対馬は神様の世界では特別なのです。

なかでも面積あたりの式内社の数を考えると、人口密度ならず神口密度では畿内の大和国をさしおいて、壱岐国がもっとも高いのです。現在の壱岐・対馬を除く長崎県は旧国名でいうと肥前国、その西半分ということになりますが、そこにあった式内社はわずか志々伎神社(平戸)の1社だけ。壱岐・対馬とは比べようありません。

朝廷が祀る神社は言うまでもなく、天皇家の祖先神につながる神話に登場する神々を祀る神聖な場所という性格があり、そこは朝廷と政治的に深いつながりのあることを示しています。とすれば九州では筑前・壱岐・対馬という朝廷から尊敬を受けた神様密集ベルト地帯が浮かび上がってきます。それができたわけって何でしょう？。

その理由は国境の島である壱岐・対馬の特徴にこそ、求められるのではないのでしょうか。この地域にある同じ名前の神社を手掛かりに考えてみましょう。それはいずれも海に関わりのある海神神社(わたつみ)、住吉神社、宗像神社の3社です。これらの神社で祀られているのは何の神様でしょう。またどんな役割を担った神様なのか、調べてみると、神様密集ベルト地帯のなぞが解けるかもしれません。



月読神社



天手長男神社



住吉神社

第4章

奈良・平安時代

五島市

“みみらく”の島ってどい



いまから1000年以上むかしの日本では、その西の果てに“みみらく”という地があり、そこから先は異界(=あの世)へつながっていると信じられていました。日本最古の和歌集である「万葉集」や同じころ作られた地理書「肥前国風土記」には美弥良久(みみらく)として登場します。さらに平安時代を代表する女流日記文学「蜻蛉日記」には以下の2首には、亡き母に会えるという島として“みみらく”が詠まれています。

このように奈良時代から平安時代にかけて、“みみらく”は特別な場所だったのです。

いづことか 音にのみ聞く みみらくの
島がくれにし 人をたづねむ
ありとだに よそにても見む 名にし負はば
われに聞かせよ みみらくの島

藤原道綱母

現在“みみらく”は五島列島福江島北部、東シナ海に大きく突き出した半島部分(五島市三井楽町)と推定されていますが、なぜ“みみらく”が異界への入り口、さらには死者に会える場所と考えられるようになったのでしょうか。702年、遣唐使はこれまで使用していた朝鮮半島西岸に沿った航路(北路)を止め、五島列島から一気に東シナ海を横断する航路(南路)をとるようにな

三井楽

ります。福江島や中通島(現・新上五島町)に遣唐使に関連する史跡や地名が多く残されているのはそのためです。三井楽に東を接している「川原の浦(五島市岐宿町)」は日本最後の寄港地であったと考えられ、遣唐使にとってもこの場所は特別な場所であったのです。

なぜなら日本の最果てに位置する“みみらく”を離れると、そこからは二度と帰ってこれないかもしれない航海がはじまるのです。当時の航海・造船技術は非常に低く、その生還率は5割程度ではなかったかと言われています。つまり2人のうち1人は日本へ帰ることができなかったという、文字通り死と隣り合わせの航海だったのです。そのように考えると遣唐使が最後に見た日本の地、三井楽(みみらく)はまさに死の世界への入り口、異界への門だったのです。そこに仏教でいう西方浄土のイメージと重なり「死者に会える島」として広まっていったのではないのでしょうか。また海を渡ると南方に観音菩薩が降り立つ山があるという補陀落(ほだらく)信仰との関連も考えられます。

いま三井楽町柏崎には日本を去るにあたって空海が残したという「辞本涯(じほんがい)」の碑が建てられています。この言葉には「日本のさい果てを去る」という空海ら遣唐使の悲壮な決意が込められているのです。

「国境の島」を抜きにして日本の歴史は語れない



遣唐使船を結えたともづな石



「遍照發揮性靈集」巻五 大使、福州の監察使に与ふるが爲の書

Column ①

まぼろしのうどん



「かんころもち」とならんで五島を代表する伝統的食品といえば、五島手延うどんです。かつては「幻のうどん」として一部の麺好きには知られる存在でしたが、今や香川県の「讃岐うどん」、秋田県の「稲庭うどん」とならんで日本三大うどんの一つにも数えられるほど。しかしその始まりについては定かではありません。一説によるとそのルーツは中国の索麺(さくめん)にあり、五島に寄港した遣唐使がその製法を中国より持ち帰り伝えたとも言われています。このことから五島は日本の麺類の発祥地であるという説もあります。

五島うどんの特徴は、五島特産の椿油と海水のミネラル成分を多く含む海塩を使用したコシのある細い麺にあります。かけうどんにして食べてもじゅうぶんに美味しいのですが、お勧めは「地獄炊き」です。鍋(釜)でお湯を沸かし、そこに乾麺をいれ湯掻くと

いうシンプルながらもっとも五島うどんの特徴を味わうことができる調理法です。これを鍋から直接つゆに浸して食べるのです。

五島手延うどんは、通常は乾麺としてつくられているので保存にも適しており、鍋(釜)さえあれば、どこでも簡単に調理できます。漁や農作業の合間に大勢で鍋を囲み、熱々のうどんを食べるのが、島で昔から見られていた光景なのです。五島手延べうどんは、島の人々の生活とその歴史に深く結びついた食品でもあるのです。



五島うどん

Column ②

薩摩塔



鹿児島県歴史資料センター「黎明館」を見学したときのことです。常設展示中世で庶民の信仰生活を表現したコーナーがあって、そこには鹿児島県各地に見られる石塔が再現・展示されていました。

ちょうど質問受付の机に女性が座っていたので、「薩摩塔はどこにありますか」と尋ねたところ、「上の階に展示してあります」ということでした。

早速階段を上がってみたら、そこには「薩摩刀」が展示してありました。鹿児島県の博物館でも「薩摩塔」は浸透していないようで、いっそ名称を変えたらどうだろうと思った次第。

ところで、薩摩塔はどんな石塔でしょうか。褐灰色の凝灰岩で作られた石塔のルーツは中国浙江省にあります。寧波郊外に梅園石と呼ばれる加工しやすい凝灰岩があって、石塔や石獅子が作られ、貿易船で日本に運ばれました。最初に発見されたのが薩摩

半島だったので、薩摩塔と名付けられたのです。

九州では平戸、博多近辺でも確認され、現在その総数は30基くらいになっています。特に、平戸島南端の志々伎神社(3基)、北部の安満岳白山比売神社(2基)、また田平地区にもあって、合わせて平戸市に10基以上存在することが確認されました。

時代は12世紀から14世紀、中国の王朝でいうと南宋から元のころです。つまり、この石塔があるところが日本と中国を結ぶ交易ルートということになります。

薩摩塔側面彫刻



安満岳薩摩塔

第5章

奈良・平安時代

新上五島町

王位石のなぞ



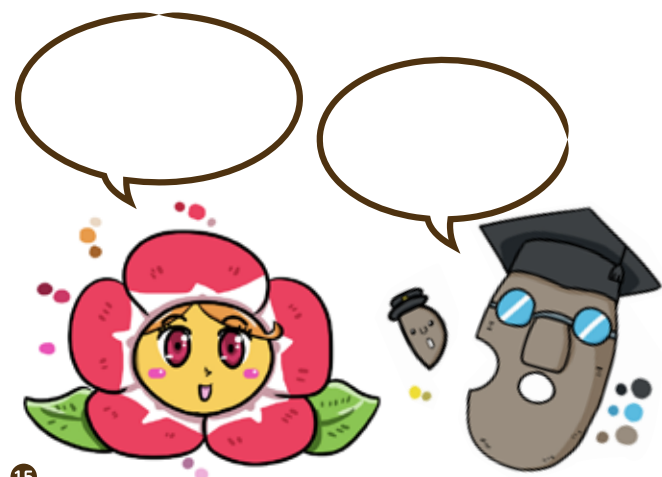
野崎島王位石

五島列島の北部に位置する小値賀島の東端から約1km、瀬戸をはさんで野崎島があります。この島の北端に沖ノ神島(おきのこうじま)神社があり、その背後に自然物か人工物かわからない巨石が対岸の小値賀島を見下ろすように、そびえ立っています。この巨石群は王位石(おえいし)とよばれ、高さは約24m、2つの巨岩に支えられてまるでテーブルのように見える平らな石の広さは8畳分ほどもあります。その昔、そこで神楽が舞われていたという伝説も残っています。対岸から見るとまるで神社の鳥居のようにも見える不思議な石なのです。

原始より日本では自然崇拝のひとつとして巨岩などを信仰の対象としてきました。王位石は、その真下に社殿が造られる以前から小値賀島をはじめとする海の民の信仰を集めてきたと考えて間違いないでしょう。

そのような時代を経て野崎島に神社が置かれるきっかけと考えられる

のが、702年に遣唐使が航路の変更により五島列島を通過したことです。新たな航路の安全を祈願するための神社を設置する必要があり、以前から人々の信仰の対象となっていたこの場所が選ばれたのではないのでしょうか。そこで当時



の朝廷により704年にもとは一つであった神島神社は二つに分けられました。一方を沖津宮(おきつみや)として沖ノ神島神社を野崎島に置き、もう一方を辺津宮(へつみや)として地ノ神島(ちのこうじま)神社を対岸の小値賀島前方に創建したと神社には伝えられています。

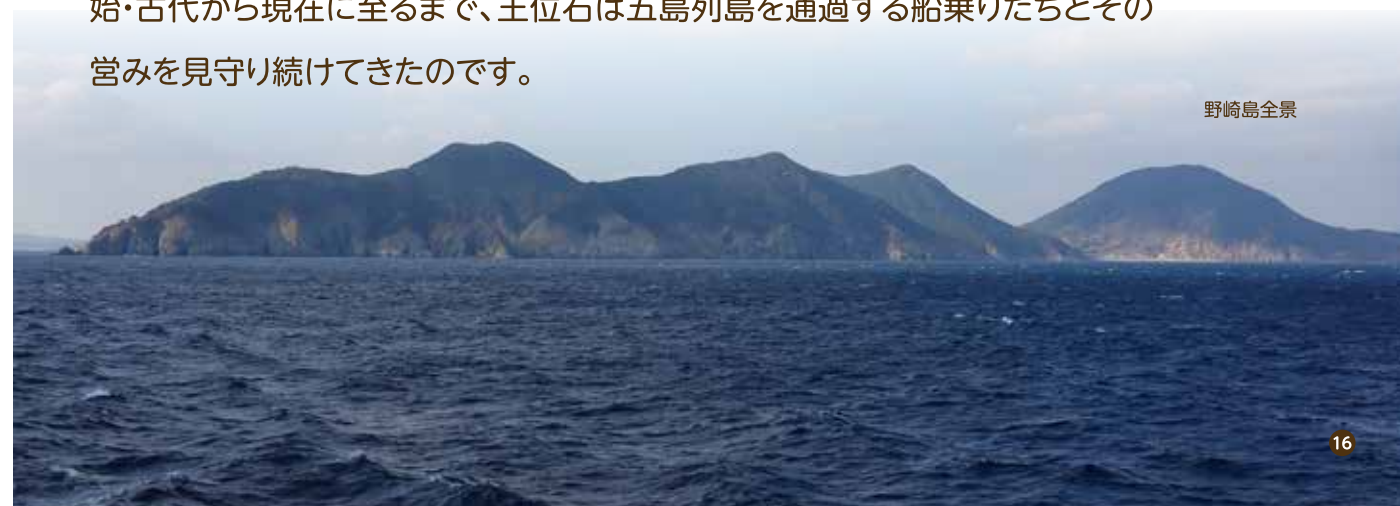
これらの点から小値賀における二つの神島神社と、玄界灘にあり沖津宮、中津宮、辺津宮からなる宗像大社との共通点を見出すのは難しいことではないように思います。両神社ともに海上交通の重要な場所に位置し、中央政府(朝廷)と深い関係を持ち、航海安全を祈願する役割を担っていたのです。

その後、中世(平安～室町時代)を中心として対岸の前方湾は大陸との交易の中継基地として栄えます。湾からは当時の船が使っていた碇石や、貿易品である中国製の陶磁器が引き上げられています。さらに、江戸時代に作成された「沖ノ神島神社氏子帳」には、神社の

氏子(その神社を信仰する人のこと)は小値賀島だけではなく、北は宇久島から南は福江島まで五島列島全域に存在していることがわかります。こうして原始・古代から現在に至るまで、王位石は五島列島を通過する船乗りたちとその営みを見守り続けてきたのです。



地ノ神島神社から沖ノ神島神社をのぞむ



野崎島全景

第6章

鎌倉時代

壱岐市・対馬市

元寇 モンゴル軍の侵攻は防げた!?



野崎島王位石

2度にわたる元寇は武士たちの徹底抗戦と運も味方して、退けることができました。ただ、この戦いでいったいどれくらいの被害があったのでしょうか。被害の詳細は記録がありません。しかし、文永の役では約4万人、弘安の役では総勢約14万人の大軍が攻めてきたというので、日本側の被害も相当大きかったことは間違いないでしょう。なかでも元軍にほぼ占領された対馬や壱岐の住民たちの犠牲ははかりしれません。弘安の役では、壱岐は東路軍と江南軍の合流場所とされたように、軍備や食料を調達するための基地にする計画だったようです。守っていた武士のみならず、女性や子供も多く拉致されたり、殺されたりしました。壱岐では「ムグリコグリが来るぞ」と言うのが泣き止まない子どもへのおどし文句になったと言われ、その恐ろしさが語り継がれます。

元軍に対する備えとして、鎌倉幕府は博多湾から元軍が上陸することを阻むために、防戦態勢を整えました。文永の役後に博多湾岸に築いた防塁は長さ約20キロメートルに及んでいます。もちろん対馬や壱岐を守る武士たちもよく戦いましたが、徹底して守るべきは九州本土の大宰府だったのです。一端、戦争が始まってしまうと大きな犠牲をこうむるのは、やはり最前線の住民たちです。そう考えると、この戦い自体を避けることはできなかったのでしょうか？

文永の役から弘安の役までの6年間に、実は元からの外交使節が2回送られています。その使者に対する鎌倉幕府の対応は2回とも斬首です。文永の役で多大な犠牲をこうむった日本にとって、元の使者の首を切ることはやむを得なかったことかもしれません。元としても正式な使者が殺害されて、2度目の日本侵攻を企てるのは無理からぬことでした。

とすれば、1度目の戦いを事前に阻止する方法はなかったのでしょうか。経過を示した年表を見てください。1274年、元軍は突然、日本を攻撃したわけではありません。その7年前、1267年にモンゴルのフビライ・ハーンは日本への外交使節を任命し国書(国の正式な外交文書)作成を命じています。その使節は、支配下にある朝鮮半島の高麗国使節とともに、翌年来日して国書を大宰府に届けています。モンゴルと高麗の国書について、どう取り扱うか、1269年、時の朝廷と幕府で意見が分かれました。朝廷はモンゴルへの返信を出すことを決定しますが、それは幕府によって握りつぶされました。その後もモンゴルからの使者は毎年のように日本へ送られてきています。

モンゴル国書の内容は、日本は代々中国と通じているのだから、モンゴルとも好(よし)みを通ずるようというのが趣旨で、武力を用いるのは好きではないという脅し文句がありながらも、「今後は両国の関係を築いて、親睦したい」というところに主眼がありました。もちろん受け入れた時には多大な貢物の要求があったかもしれませんが。

また、元寇の前、そしてその後にも日本からの貿易船が元に出されています。正式な国交はなくても、日本の商人たちにとって、元と貿易を行うことは必要だとされ、実際に行われていたのです。かつて、中国に派遣されていた遣唐使、それが廃止された後も、商人たち(ときには平氏などの政権担当者)によって中国との貿易は続けられており、そのことを踏まえて、対外交渉によって戦争を避ける道はなかったのか、元寇に至る過程を見直して考えてみることも必要かもしれません。



文永の役古戦場



Column 3

鎌倉時代にもあった 和牛ブランド10

□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□

『国牛十図』(こくぎゅうじゅうず)という絵があります。成立は1310年といますから、2度目の元寇(弘安の役)から30年ほど後に画かれたものです。まだ元軍との戦いの記憶が残っていた頃でしょう。全国から集められた京都において、肉付きや骨格の特徴から産地を区別できるということで画かれた和牛の絵です。いわば全国の有名ブランド牛十傑。その最初に筑紫牛があります。ですが、実はこれ、「壱岐嶋牛を以て之を称す」という注釈があり、壱岐島産の牛なのです。

そのかたちが牝牛顔で角が細く、耳に切れ込みをして、骨は細く、皮は薄いなどの特徴があり、全てその姿は美しいとあります。かつて異賊がこの島を襲撃して、いけにえに用いたためほとんどいなくなったが、今は復活しているということです。壱岐牛が有名であることは今に始まったことではなく、鎌倉時代にはすでに全国区でした。とはいえ、美味しかったかどうかは、壱岐島を襲った元軍・高麗軍の兵士のみぞ知る…です。



国牛十図 筑紫牛

Column 4

金田城と漫画「アンゴルモア」

□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□

663年の白村江海戦で唐・新羅の連合軍に敗れた日本が、亡命百済人技術者の指導で対馬に築いた朝鮮式山城を金田城と言います。唐・新羅連合軍の来襲に備える役割の城です。写真を見てください。これが1350年前に築かれた城壁、こうした城壁が、黒瀬の城山と呼ばれる山を取り巻いています(西側は絶壁)。金田城は『日本書紀』に記載され、かつ城戸などの遺構も素晴らしく良く残っていることから、国の特別史跡に指定されました。城山に登ると、素晴らしい景色を見ることができます。まさに対馬第一の絶景。

ところで、皆さんは「アンゴルモア」を知っていますか。この漫画に金田城が登場するのです。舞台は鎌倉時代、モンゴル・高麗軍が攻めてきた元寇(文永の役)です。しかし、文永の役は1274年、金田城は667年の築城で奈良時代に防人が居たことは確実、そ

れでも500年の年代差があります。それで作者は次のようにつじつま合わせをしました。

防人の子孫が対馬に土着して金田城を拠点にしていた、1019年の刀伊の入寇、すなわち女真海賊の来襲の際には勇敢に戦い刀伊祓と言われた、その彼らが文永の役では対馬地頭代の宗資国(助国)と協力してモンゴル・高麗軍と戦うという設定です。

金田城に関する歴史的事実と、作者が考え空想したフィクションの両方を理解して楽しんでくださいね。



金田城石垣

第7章

南北朝・室町／戦国

新上五島町

日島の石塔に隠されたひみつ



野崎島王位石

日島(ひのしま)は五島列島若松島の西北に位置する面積約1.4km²の小さな島です。隣の有福島から橋を渡るとすぐに、まるで賽の河原のような驚きの光景が目飛び込んできます島の南端部、曲崎(まがりざき)とよばれる砂嘴(さし)[※]の部分がたくさんの石塔によって埋めつくされているのです。その数は70を超え、離島部にこれだけの数の石塔が集中しているのは非常に珍しいといえます。いったい誰がどのような目的でこれらの石塔を建てたのでしょうか。またその石はどこから運びこまれたのでしょうか。

専門家による研究がすすむにつれて、これらは鎌倉時代から江戸時代にかけて建てられたものとわかってきました。そしてこの石塔には、当時海を舞台に活躍した人々＝海民が深く関係していることが明らかになってきています。

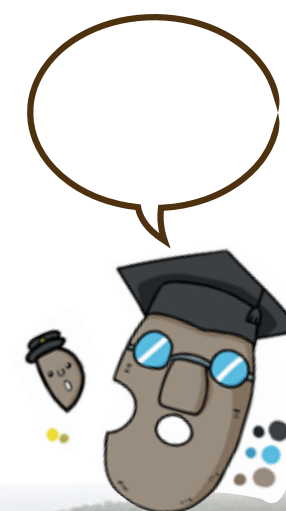
※さし…沿岸流によって運ばれた土砂などが積み、海岸部からくちばし状にのびた地形のこと。



1300年代(鎌倉時代)に建てられた石塔には凝灰岩という石が使われており、その特徴から作られた場所は九州内(熊本)だということがわかっています。さらに1300年代後半から1400年代にかけては、兵庫県の御影(みかげ)地区を産地とする花崗岩(かこうがん)＝御影石や、福井県高浜町日引(ひびき)地区を産地とする石(安山岩質凝灰岩)＝日引石をつかった石塔があらわれます。前者は瀬戸海を通る貿易ルート、後者は日本海岸を通る貿易ルートの存在を示します。この石塔群が集中して建てられた鎌倉時代から室町時代前半は、前期倭寇の活動がさかんであった時代とも一致します。彼らは海を越えて朝鮮半島沿岸から中国にかけて広く活動し、国内にも交易ルートを築いたのです。

海民たちは交易で得た品物を各地に運び終えた後、その荷物の代わりに船の重し(バラスト)としてこれらの石を船底に積んで持ち帰りました。彼らはその石を使って海で亡くなった仲間を弔う墓を建て、またある者はいつ命を落とすかもしれない我が身を思い生前に自分の墓石を建てたのではないかと思います。

今は日本の西の端として語られることの多い五島列島ですが、歴史を振り返ってみると、東シナ海に面しているこの地域は大陸(中国や朝鮮)と結ぶ「海道」の最先端に位置していたのです。日島に石塔を建てたのは、これらの海に生きる人々でした。石塔群はかつてこの島が海上交易の拠点として繁栄したことの証なのです。



第8章

南北朝・室町／戦国

五島市

王直って何者？



倭寇図鑑(部分)

1550年、平戸にポルトガル船が入港したのが、日本におけるヨーロッパとの交易(南蛮貿易)の始まりとされます。またその直後にイエズス会宣教師フランシスコ・ザビエルも平戸を訪れキリスト教の布教を開始します。ここでひとつ疑問がおこります。なぜ平戸で貿易と布教が始まったのかということです。じつはその疑問を解くカギは、当時日本から中国の海域で活動していた「海商(後期倭寇)」にあります。

時代は少しさかのぼり1543年、ポルトガル人が種子島に漂着し日本に鉄砲が伝えられたとされています(鉄砲伝来)、同時にポルトガル人が日本との交易に乗り出すきっかけともなったのです。そのときポルトガル人が乗っていた中国船の船長は五峯(ごほう)と名乗りましたが、彼こそ

中国から東南アジア、さらには朝鮮・

日本を舞台にかけて活動していた海商の頭目「王直」と言われています。彼は中国、徽州歙県(現在の安徽省黄山市)出身で塩の商人として活動していましたが、後に海商に転じ、そこで頭



角を現します。彼の活動時期はいわゆる後期倭寇の最盛期と重り、王直は「倭寇王」と言われ東アジア海域全体にその名をとどろかす存在になりました。

1540年代前半、王直は日本における交易の拠点として五島に目をつけ、当時の領主である宇久盛定から現在の福江市に屋敷を構えることを許されました。さらに王直は平戸・松浦一帯を支配していた戦国大名、松浦隆信とも結び平戸城下に屋敷を設け多くの部下とともに居住し交易をおこない、莫大な利益を手に入れていたのです。

当時の海商たちは人種や国境を越えた独自のネットワーク(情報網)でつながっており、それを通じて王直と交流のあったポルトガルは平戸に来航することができたのです。これ以降、平戸は南蛮貿易の拠点に躍り出ることになりました。余談にはなりますが、1549年のザビエル来日に同行した鹿児島出身の日本人ヤジロウ(アンジロウ)も海商出身であったともいわれます。またザビエルの平戸来訪にも王直一党が関わっていたとも言われています。

1559年、王直は明朝によって捕えられた後処刑され、その死とともに後期倭寇は消滅していきます。しかし「鉄砲伝来」「南蛮貿易」「キリスト教の布教」—戦国時代末期の日本を揺るがし、後の歴史に大きな影響を与えることになるこれらのできごとは、王直をはじめとする海商たちを抜きにしては語ることはできないのです。



明人堂



籌海図編卷二 日本国図

第9章

南北朝・室町／戦国

対馬市

秀吉の朝鮮出兵は
対馬にとって…

清水山遠景

戦国時代、対馬島主の宗氏は大名に成長し、九州本土にも軍を派遣していました。その権力の背景ですが、宗氏は日朝貿易を統制する立場にありました。

1587年、豊臣秀吉が島津氏を討つために、大軍を編成して九州にやって来ました。この時すでに秀吉は、朝鮮を通して明に打ち入ろうと考えていたのです。

秀吉側近の小西行長は、朝鮮出兵が避けられないと今後の展開を予想し、宗義智に娘マリアを妻合わせたと言われています。その影響でしょう、義智も入信してダリオの洗礼名を持つキリシタン大名になりました。

秀吉は肥前名護屋城を築城し、さらに壱岐の勝本城、対馬の清水山城、撃方山城を築かせ、朝鮮渡海のルートを整備しました。

1592年文禄の役(朝鮮では壬辰倭乱)が始まりました。第一軍は、小西行長(7,000人)以下、宗義智(5,000人)、松浦法印鎮信(3,000人)、有馬晴信(2,000人)、大村喜前(1,000人)、五島純玄(700人)計18,700人です。第二軍は加藤清正ら22,800人、全体では158,700人。一部留守兵もいますが、10万を超える大軍が対馬北部の大河内湾

あたりから釜山を目指しました。

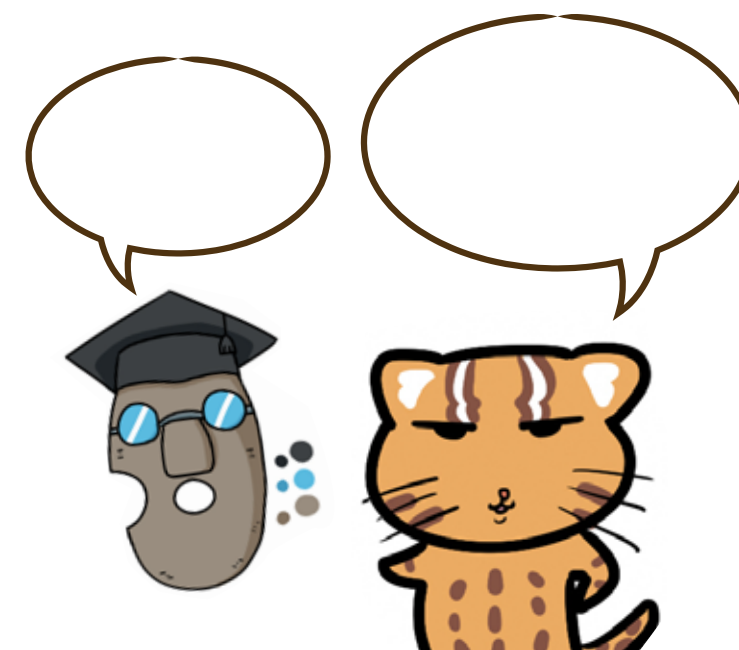
さて、対馬の役割です。大河内湾沿岸、鰐浦あたりには各大名の陣屋が造られ、住民から食糧、牛馬、大工道具などを無理矢理「押し買い」しました。陣屋建設のため森林を伐採された山も荒れたに違いありません。

また、対馬には朝鮮情報がたくさん集積されていました。最も重宝されたのは朝鮮通事(通訳)を諸大名へ派遣したことでしょう。この二つは対馬がもつ強みでしたが、意に反して戦争に利用されました。

この戦争は対馬島民を悲惨な状況に追い込みました。対馬は塩・海産物を朝鮮半島・九州に持って行って売り、穀物などを購入する交易で島の暮らしが成り立つのに、半島とは通交が断たれ、九州本土へ行こうにも働き手は大半徴発され、帰郷しない者も多かったのです。作り手のいない田畑は荒れて食糧不足は深刻でした。

戦争が終わった後、島民に出された通達に「国中において男子女子に限らず赤子を踏み殺してはならない」(『上対馬町誌』より)というのがあります。いかに戦争が悲惨か、これでおわかりでしょう。おそらく壱岐島にも甚大な影響が及んだはずです。

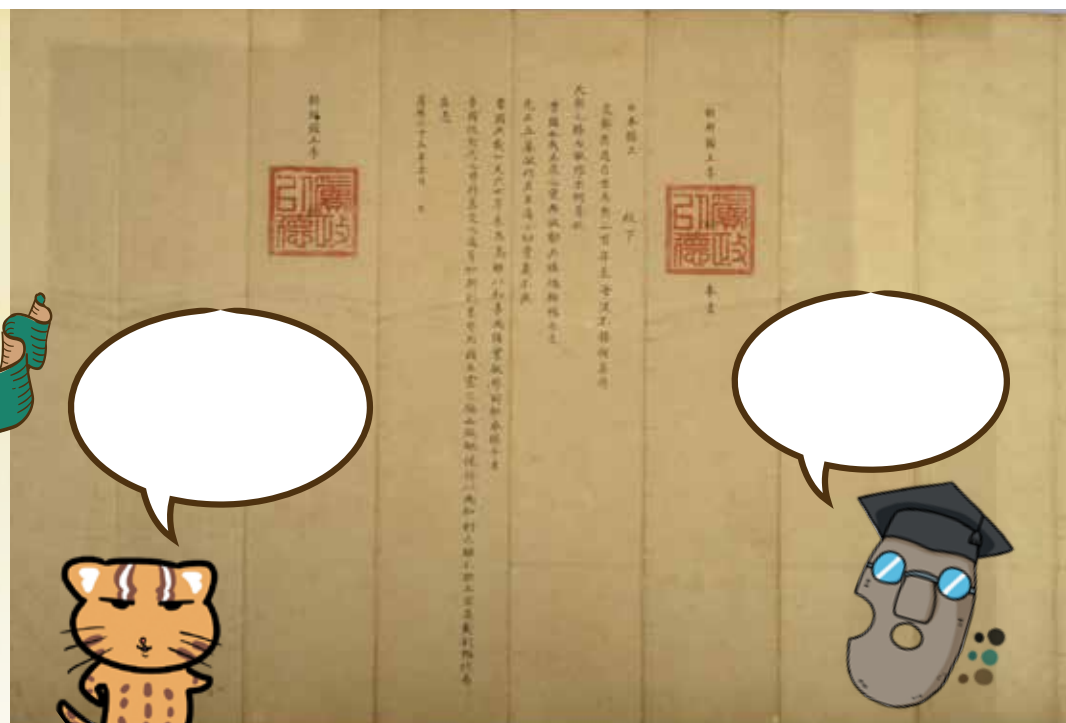
日朝双方の多数の人命を失い、多くの財物を浪費した無駄な戦争が終わったときから、朝鮮貿易復活は対馬にとって死活問題となっていました。



第10章

江戸時代
対馬市

えっ、家康の二セ国書!?



朝鮮国書

1598年秀吉の死によって、ようやく戦争が終わりました。1日も早く朝鮮貿易を再開しなければ対馬の経済は持ちません。翌年から朝鮮に使者を送って交渉を求めましたが、使者は帰ってきませんでした。朝鮮にしてみれば、宗義(そうよし)智(とし)以下対馬軍も戦闘に加わったのですから、まさしく敵です。それでも、あの戦争は秀吉の命令でやむなく参加したことを訴え、並行して日本に連れて来られた朝鮮人俘虜(ふりょ)の送還を続けました。

関ヶ原の戦い後、対馬の領有を認められ初代対馬藩主となった義智は、家康から朝鮮との国交回復を命ぜられます。早速朝鮮と交渉を行いますと、二つの条件が出されました。

- 徳川家康から先に国書を送ること
- 朝鮮王陵を荒らした犯人を差し出すこと

先に国書を送るということは、先の戦乱に対する謝罪の意味が含まれますので、それを家康に求めることはできません。義智と重臣柳川調信らは、室町時代に足利将軍の国書を対馬で偽作したように、家康の二セ国書を送ることにしました。王陵荒らしの犯人は島内の2人の犯罪者を

「国境の島」を抜きにして日本の歴史は語れない

縛り上げて連れて行きました。

朝鮮側では、国書に疑問があり、犯人は若すぎる、どちらも怪しいと薄々わかっていたようですが、このあたりで使節を派遣してもよからうということになりました。というのは、その頃女真(じょしん)族(後の清王朝)が勢力を増して、北から攻めてくるような情勢でしたので、日本との国交回復を急いだ方がいいとの判断でした。ただし、日本側の要求が通信使なのに対し、回答兼刷還(さっかん)使、つまり家康の国書への回答使であり、日本に抑留されている俘虜を帰国させる役割というわけです。でも、対馬藩も大変です。家康の国書が偽作なら、その返書である朝鮮国王の国書も作り変えなければなりません。国印の偽造も合わせて、対馬藩の技術はスゴイですね。

1607年、江戸時代になって初めての朝鮮使節が来日しました。正式には回答兼刷還使ですが、一般的には第1回朝鮮通信使と呼ばれています。家康としても徳川政権の正統性を内外に誇示するという点で、大変満足だったはずです。

この後江戸時代には、合わせて12回の通信使が来日し、うち文化の通信使(1811年)は経費節約のため対馬の府中(現・厳原)で国書を交換しました。隣国同士のパラ・友好関係が200年以上続いたわけで、世界史的にも珍しいことです。



宗義智墓



宗義智像

第11章

江戸時代

対馬市

雨森芳洲の何がスゴイ？

普通に紹介すれば、芳洲は対馬藩朝鮮方佐役(さやく)という対朝鮮外交の実務担当官です。25才のとき中国語習得のため長崎に遊学しました。朝鮮の学者と交流するに当たって「唐音(とうおん)」で漢詩など発音すれば一目置かれます。また、釜山(ぷさん)にわたり草(そう)梁(りょう)倭館(わかん)(和館)に滞在して朝鮮語修業に励みました。国際人芳洲は日・中・韓3カ国語を操(あやつ)って活躍したのです。これだけでも十分スゴイ。

さらに雨森芳洲の学識のスゴサを紹介しましょう。まず、正徳の通信使来日前に新井白石との間で「国書復号」論争が起こりました。白石は徳川将軍の称号を、これまでの「日本国大君」ではなく、足利義満が明の皇帝に送った国書と同じ「日本国王」に戻すべきだと主張しました。これに対し芳洲は、徳川将軍は天皇から征夷大将軍に任命されて政権を預かっているのだから、「日本国王」を名乗るのはおかしい、これまでどおりにすべきだ、と反論しました。結局、白石が主張を通しましたが、「対馬にありつるなま学(がく)匠(しょう)」(『折りたく柴の記』)と、いらだちを隠せず、かえって芳洲を有名にしました。

次に、外交官手本の本丸です。正徳の通信使一行のうち、芳洲が最も親しく交わったのは上通事の玄(げん)徳(とく)潤(じゅん)でした。二人の交流は「誠信の交わり」と言われます。芳洲は自身の著書で、互いに欺(あざむ)かず争わず、真実をもって交わることを誠信という(『交隣提醒(こうりんていせい)』)と記しました。

「国境の島」を抜きにして日本の歴史は語れない



1729年(享保14)、62才の芳洲が裁判役(外交官)となって釜山の草梁倭館(和館)に赴任したとき、ちょうど玄徳潤が釜山訓導として駐在していました。彼は古びていた応接所を、私費でもって修復し「誠信堂」と名付けたのです。これに対し芳洲は「誠信堂記」を認(したため)めて贈りました。ここは自然が大変美しい、玄君は自然の美しさを堂名とせず「誠信堂」と名付けた、交隣の道は誠信を先としなければ隣国との平和な関係はつくれないからだ、と二人に相通ずる外交理念を語っています。

もう一つ、享保の通信使のエピソード。ここでの芳洲と朝鮮側製述(せいじゅつ)官(漢詩文が得意)の申維翰(しんいかん)はライバルでした。芳洲が、我々日本・日本人のことを「倭」・「倭人」と呼ばないよう申し入れると、あなたたちも我を呼ぶに「唐人(とうじん)」と言うではないかと反論されました。芳洲は、日本は古くから朝鮮を中国と同等に扱って「唐人」というのであると返しました。

言うべきは言う、これも外交官の基本です。



雨森芳洲像

